



衛生国家ニッポン

Q.日本はなぜ、新型コロナウイルスの感染症の死者が欧米諸国に比べて、それほど多くないのか？の疑問に対して、A.「日本人のマナーが理由」とか、「日本人は免疫力が強い」とか、(麻生副総理が言うところの)「民度の違い」が要因ではないかと、諸説・珍説が巷間で言われています。間違いなく現代の日本人は、衛生的な社会環境のもとで暮らしています。日本の公衆衛生は、今では相当程度確立されているといえるでしょう！

明治10年代にコレラが来襲して、日本でも十数万人の死者(今日の皆様との邂逅は、奇跡とも思えてしまうほど驚愕の死者数)が出たのをきっかけに、市民の健康をどうやって守るかが政府の大きな課題だったようです。都市に人が集まって生活すれば、ゴミやし尿の処理がうまくできず、居住環境が病原菌の温床となって衛生面で深刻な問題が生じます。さらに、貧しくて医療を受けられず、薬が買えない人々は感染症に倒れ、生活環境の悪化に拍車がかかります。当時の内務省の衛生局では、公衆衛生を改善するための対策が焦点となりました。その甲斐もあって、爾来、日本人は、衛生的な社会環境のもとで暮らすことができました。では、日本の公衆衛生は、誰の力で、どのように発達してきたのでしょうか？

NHK BSプレミアム(8月19日)「衛生国家への挑戦～3人の先覚者たち～」新型コロナウイルスに揺れる日本。日本人は世界規模の感染症とどう闘ってきたのか？をテーマに日本人の衛生意識の向上に尽力した3人の先覚者に着目した番組がタイミングよく放映されました。(幕末から明治へかけて)日本人の衛生意識の向上に尽力した緒方洪庵(写真中央)、長与専齋(左)、後藤新平(右)の3人の先覚者に着目する内容でした。緒方洪庵(1810年～1863年)は大坂に適塾(大阪大学の前身)を開き、人材を育てながら天然痘治療に貢献し、日本の近代医学の祖といわれています。長与専齋(1838年～1902年)は、医師、医学者から官僚となり、内務省内の初代局長で、伝染病の流行に対して衛生工事を推進し、また衛生思想の普及に尽力しました。後藤新平(1857年～1929年)は、長与から愛知医学校長兼愛知病院長であったときに見出され、衛生行政の後継者となりました。日清戦争後、大陸から20万人の帰還兵の大規模な検疫(水際対策)を成功させ、世界に日本の衛生力の高さを示したとのこと。



NHK「英雄たちの選択」より

特に、長与は岩倉使節団に参加、(欧米では)国が国土の清潔を守っていることに感銘し、「自分でやるのは養生」であり、「国がやるのは衛生」であると「衛生」は国でないといけないと気づくのでした。“怖い相手はウイルスではなくて、人間の無理解”が原因。そして、長与や後藤の衛生思想は、近代的な上下水道の整備となって具現化されます。その後、多くの国民の理解と関係者の努力の甲斐があり、ようやく「衛生国家ニッポン」が実現されたのでした。

ところで、今般の新型コロナ禍の現状を鑑みますと、最強の国防力を持っている国(米国)でも、莫大な死者や感染者が出ています。国家の“民を守る力”がどれだけあるか=国民安全保障という考え方からいえば、私たちは、他国と比べても衛生国家によって、護られているのだ！と、素直に喜んでよいのではないのでしょうか...!!

